

ロマンスム  
アンドレ・ジイドの浪漫主義

— アンドレ・ワルテルの世界 —

中 島 昭 和

(佛文學研究室)

アンドレ・ジイドの作品の傳記性はゲーテのそれと共に極めて特徴的だ。「文學の全領域に亘つて(その人間乃至生活と作品との——筆者註)これ以上完璧な融合は他に類例を見ない」といふ彼のゲーテ評はそのまゝジイド自身にあてはめて通用する評言だらう。

個々の作品の發展は單にその美學的見地や技巧の圓熟といふ點にとどまらず、人間としてのジイドの思想生活・思想の展開進歩と密接にかゝはりあつてゐる。さういふ彼の傾向の中でその濃厚な告白性の果す役割も指摘されなければならないだらう。「藝術では、一人稱はないのだよ」と、かのワイルドに作品に於けるその告白癖を揶揄されたといふ逸話は有名だ。

その様な一般的にジイド作品に共通する特徴を又一段と強く刻印づけられてゐるものは處女作「アンドレ・ワルテルの手記」(Les Cahiers d' André Walter) だらう。

それといふのも、ジイドは其處に執筆當時の彼の「戀愛の多くと、音樂と形而上學と、ポエジーと」肉欲とそれを禁止するモラルと、つまり、その生活と思想との全てを、何の保留もなく一切投げ出してゐるのだから。「この書物が僕の處女作である許りでなく、また僕の全書であつて、この書物の彼岸に、僕は何ものをも見なかつた」「僕の一生はそこに終り、そこに完結する筈だと僕には思はれてゐた」といふ彼の證言からもその事は頷かれる。

實際、ワルテルの手記は、ジイドその人のなまの日記を多く交錯させてゐる事からも、ワルテルとは、近似的誤差の極めて些少なジイドと見て差し支へあるまい。そして「戀愛の多くと、音樂と形而上學とポエジーと」に充ちてゐるワルテルの思想とは非常にロマンティックな色彩を帯びてゐた事は云ふまでもない。そしてワルテルこそ青春時代のジイドのロマンティズムの託身、乃至魂の證人であり、ワルテルの運命はそのまゝジイドのロマンティズムの辿つた運命に外ならないのだ。

幼年時代からジイドを取巻く人々は、母や叔母クレールや、アンナ・シャツクルトンであり、彼女達の敬虔なつゝしみ深い美徳が、新教徒としての彼の家庭の根幹を形成する雰圍氣だつた。そして、當時「教義として明確な規定もなく、確たる神學によつて支へられてもゐなかつた、フランスのプロテスタンチズムは」と A・M・シュミットは證言してゐる。「まさに瓦解に瀕してゐた。そしてその精神的不統一は、正確な教義の缺除を、厳格なピュリタニズムで補はうとしてゐた。それは哀れな信者達に、生存とは不斷の禁欲であ

る。と教へる。生に於て罪ある自我、規律に不従順な自我に外ならぬ内發的な自我の表現は抑壓され、更に芟除されなければならない。眞の自由は、全て、その原則を、聖書の不斷の冥想によつて明らかにされる意志に、見出す様にしなければならない」

つ、ましい新教徒の家庭に成長したジイドが、その教育から受取られたモラルは、まさにその様な厳格なピュリタニズムのモラルだつた。勿論、その様なモラルをはつきりと一つの體系として規律されたと云ふのではなく、家庭の雰圍氣として、事ある毎の母の教訓として、長い時日の間に、心の深層の襷にまで、沁み入つて行つた謂はゞ一つの精神とも云へよう。そしてその様なモラルは「いきなり反抗するといふ種類の間人ではなく、それとは正反對に、服従することを、規則に従ふ事を愛した」ジイドに於ては、決して最初から嫌悪と澁面とを以て、受取られたのではなかつた。寧ろ、恐らくは、様々なブルジョア的偏見と御都合主義のモラルとのアマルガムとして教へられただらうモラルに進んで服従して行つたのだつた。ばかりでなく、やがて、自身、宗教的熱情を以て接して行つた福音書から見出す教訓とは、まさしくその様な形式道德への服従の勵ましに外ならなかつた。然し、眞摯な、偽善を許さぬ純潔な精神は、それらモラルの最も純粹な形式で自己を律しようとするものだ。規律と自己との間に、些かの妥協も、懸け引も拒絶する厳しさに於て。

そこから、ワルテルの最關心事である、「純潔」といふ概念が明らかにされて来る。厳しく肉體を蔑視する事。「禁欲の苦行」によつて魂を純粹なまゝに保つこと。ワルテルの理想、ジイドのロマンティズムを特徴づける理想は「手記」に引用された黙示録の一節に見る事ができよう。

「汝は汝の傍らに、その衣服を汚さざりし人々を見ん。彼等は、白き衣服をきて歩まん。そは彼等、その値ありとされればなり。うち克たんものには、我れ白き衣を彼に纏はせん。うち克たんものには我れ靈魂の糧を與へん。——その上に他の何人も知るを得ざりし一つの名の記されし白き石を」

この道に従ふ事、白き衣服をきて歩む影像が彼の理想の姿だつた。

既に従姉 エマ＝ユエルへの愛は、ワルテル—ジイドの心を専ら占める重要な課題となつてゐた。こゝで注意しなければならないのは、ジイドに於ける、愛、乃至戀愛觀の特徴だ。

これも又、彼の精神を形成したピュリタニズムの教育によるものと云へようが、彼に於ては、ただ内發的な、あふれ出す自然な愛は、そのまゝでは何の價值感をも與へない。愛の幸福とは、自己の立つてゐる平面での、アンドロジースの半身が合體して作りなす圓環、一個の完結としては把へられない。愛の對象を無窮の高みに置いてしまひ、幸福とは、その愛する魂への無限の接近であり、その事は、愛する魂の前に自らを價值あらしめる、徳の追求によつてはじめて可能となるのだ。徳の追求——それは、とりもなほさず「罪ある自我、規律に不従順な自我」の抑壓、若しくは芟除の事で、要するに、ピュリタニズムのモラルが規律する通り、厳格な禁欲の苦行による、魂の救済に外ならない。かうして、彼

が福音書から汲む事を得た教訓は、期せずして、内心の深い要求となつてゐた。エマニュエルに對する愛の感情を、説明し、強める事によつて、前述した理想への一層熱情的な決意をうながす事になる。

かうして「魂」とはワルテル——ジイドにとつて一切の、憧憬と祈念をこめた至高の言葉となつてゐた。この魂の救済といふ、プラトニツクな理想から、眼を逸らさせるものゝ一切、肉體の墮落を誘ひ、ひいては魂を、泥土に漬けかねない誘惑をさしのべるものとして、外界の現實は激しい嫌忌の對象とならねばならなかつた。彼は、外界とは別に、自我の中に、一個の理想世界を形成する事を志す。これが即ち、青年時のジイドのロマンチスムの世界に外ならない。それは孤獨な夢の閉ぢられた世界。

「何といふ夜の静けさ。私は睡りに落ちるのが怖ろしい位だ。孤獨である。黒い背景の上への様に思想は浮み出る。來るべき時間は、暗闇の上に空間の一つの帯の様にあらはれる。幻影が生ずるやそれを追ひやるものはない。もはや私は幻影に外ならぬ」

モラルの面で、現實の彼岸に、一つの理想世界を豫想するものにとつて、審美的にも、一個のプラトニスムの夢が適合した事は言ふ迄もない。

彼が、ほんの幼い時、クロズヌ街の自宅で舞踏會が催された。その折、深夜、物音にふと眠りを覺まされ、好奇から物音の出所を探つて階段を下りて行つた時、物蔭から垣間見た舞踏會の場景に、彼は世間の現實とどうつて變つた、より華々しい、より感激の多い、別な人生を見る思ひに感動した。といふ挿話を自傳で語つてゐるが、それと關聯して、現實の世界、平常の世界、認證された世界と平行して存在する、もう一つの、さだかでない、定義のしようのない世界が存在するといふ信念が、多年心を去らなかつたといつてゐる。この挿話は現實を平板な日常性から救ひ、生を濃密化しようとする詩人的氣質の本能的な要求と、「隠秘な世界を空想しようとする」ロマンティツクな傾向とのいちばな芽生えを示してゐる。

その様な氣質の、多分に冥想的の青年ジイドにとつて、眼ざめかけた感性の多感な潑醉を見る様になつたワルテル時代、詩と音楽と形而學上とが、専ら、偏愛の對象となつた事は、極めて自然な成行きと言へよう。人生のプリズム的多様の斷片よりも、理想の美が、形よりも抑揚と感動が、遙かにワルテルを惹きつけるのだ。

さういふ浪漫的な雰圍氣の中で、自己の上に、たゞ自己の魂の内部にのみ、身をかゝめこみ、其處に影落す感動から、ワルテルは一つ一つ思念の絲を紡ぎ出し、恰度、蠶が、自分の吐く絲で自分の殻を形成する様に、自己の世界、孤獨に閉ぢられた世界に、理想美の夢を織りなすのだ。そして、この夢の中核をつくりなす、謂はゞ、支へが、信仰であり、純潔な魂の救済といふ、理想主義的憧憬であるとすれば、その姿勢に、一層の拍車をかける楯ともなるものは、象徴主義的な審美觀と、ショーペンハウエルの哲學とだつた。象徴主義の美學は、現實の背後に、理想美の實在を約束するし、ショーペンハウエルの哲學は外界

を、個人の夢の表象と説く事によつて、その實在をさへ、浮動させ、ワルテル——ジイドの閉ちこもる、夢の世界の實在を強調する。實際、次のワルテルの獨白が、どんなにジョーベンハウエルに近い事か。

「かくの如く我々は皆、事物に對する我々の夢の中に生きてゐる。我々から放射する一つの雰圍氣が、我々の魂を包み、事物に對する。我々の視覺を、無意識のうちに色づけてゐる。そしてその雰圍氣たるや、他人の侵入を許さないものだから、従つてそれは、孤獨を以て吾々を圍繞する。——そしてまたそれが、様々に彩どられてゐるから、事物に對する吾々の視覺は、従つて個性的になるのである。——常に人は、彼の世界のみをしか見ない。そして人は常に、それを、さう見る唯一のものである。それは一つの幻燈であり、それは一つの空中機關である。そして、光線を、様々の色に染めるプリズムは、我々の裡にあるのである」

一つの表象の世界、「白き衣を着て」彼岸の世界に歩む姿が、至高のあるべき姿として燦然と輝いてゐる世界、戀人との、永遠な魂の抱擁が、可能な世界、この一個天使的清淨世界に住んでゐる事が、ワルテルの祈願であり、その爲にこそ、ワルテルは、現實に背を向けて、孤獨の世界に立てこもつたのだつた。とすれば、この夢の絶對を維持する事は、ワルテルの緊急な仕事でなければならない。然し、現實のたゞ中に、一個、現實とは別の秩序を有つ、非現實の世界を、それに絶對性を與へ乍ら確立する爲には、必然的に、それを取りまく現實の干涉との不斷の闘争、現實隔離への抵抗を必要とする事は言ふまでもない。

「私は外に出るのはよさう。私は、私の部屋に禁居しよう」<sup>(af10)</sup>

「そしてランプをともし、戸を閉め、一人で勉強した」<sup>(af11)</sup>

ワルテルは、かうして、常に現實を避けなければならない。現實と面つきあはせる事を拒まなければならない。

ボードレールが、平板蕪雜な現實の中に、彼のみの人工天國を現出したのは、専ら阿片やアシシユの助けを借りた、昂奮と陶酔のおかげだつた。この陶酔が覺めると同時に、人工天國は、雞鳴を聞いた亡靈の様に、色褪せなければならない。人工天國を現出し、其處に住まはうとするものにとつて、醒めてゐるといふ事は、この上なく悲劇だ。彼は、其處で、自己の天國の虚無と、無秩序な外界の氾濫に立會はなければならないから。ワルテル——ジイドにとつて、この外界の氾濫を防ぎ、陶酔を維持させようと試みられた手段は熱情と祈禱だつた。

「特に情熱が衰へてはならない。——でないといふ總てが失墜する。またそれを考へてもいけない。情熱の全生命を虚無とする思想が、來つて私の魂に觸れない様に。——たゞ新

「らしい陶醉を不斷に求めて、常にそれが燃え立つてゐる様にする事」<sup>(註12)</sup>

「けれども精神が衰頹しないやうに十分に注意を拂へ。——破れん事をおそれて、夜を徹して祈るべし」<sup>(註13)</sup>

「感動を倍加すること。たゞ自らの肉體のみに閉ちこもらない事。魂をして、人々の裡に臨ましめること。即ち、他人の感動に際しても、自らの場合に於ける様に、魂が戦慄せん事を。ひとり自らのみを静観するのをやめれば、もはや魂は、それ自身の苦惱を忘れるだらう。外部の生活は、さほど激しいものではない。一層熾烈な戦慄は、心中の熱情のうちにある。褒賞が、魂を昂揚せしめん事を。魂が倨傲なるに従つて、その振動も又大きい。現實よりも、寧ろ空想を。詩人の想像は、事物の外見のうしろに隠された理想的な眞實を、より明らかに溢れ出でしめる。決して魂が、不活潑に墮ちざらんことを熱情を以て、それを養はなければならない」<sup>(註14)</sup>（傍點筆者）

此處には、物質を媒介として、現實の意識を鈍磨させ、自意識の無限分散によつて、其處に得られる夢の中に身を投げ出すと言つた。デカダンの詩人の求めた受身の陶醉とは、逆の方向に求められた陶醉がある。ワルテル——ジイドの陶醉とは、極度に意力的な、自我の凝集によつて得られる、生の充實感、乃至、昂揚感に求められてゐる。ワルテルには疲労がない。其處に彼の若さと、夢の單純さを見る事もできるが、常に積極的に、自らの熱情を以て、假構の世界を維持しようと努めてゐる。それは、單に外界を逃避する、といふ消極面だけでなく、「魂の純潔」といふ理想追求の、積極的な意圖のもとに假構された世界だからであらう。ともあれ、この「魂は自らの飛翔に酔ふ」と言つた式の、自己陶醉、一種のヒロイズムは、アリサにも、ミシュルにも、メナルクにも、ラフカディオにも見られるところで、ジイドは、この種のヒロイズムを、平常よりも、あらゆる意味で、自我を高める状態として好んでゐた様だ。

かうして、現實の無視乃至蔑視の上になてられた。非現實の夢想界に、陶醉してゐる間問題はない。それがワルテルにとつて、唯一の現實、實在の世界。調和し、完結した、破綻のない世界で、その中でワルテルは、はじめて、自分のモラルが命ずる、天使的清淨を持し乍ら、彼の理想に最も近く生きる事が出来るのだ。

然し、魂は夢への飛躍を容易に成就するとしても、肉體は、依然として、本質的に地上のものであり、現實の世界と相渉り、正常に外部に發展する事を求めるものだ。一個非現實の夢想世界の調和を破り、それを一個の完結した世界とするのを妨げるのは、常に、肉體の要求の、絶ち難い地への妄執であらう。

「魂は上昇しようと努める。——肉體が錘になる」<sup>(註15)</sup>

ワルテルが、常に外界を避け、部屋に蟄居しようとするのは、單に、無意味な外界の氾濫によつて、自己の夢が、虚夢に歸するのを恐れるといふ氣持だけではなく、更に、肉體

が惹かれて行く外界に、自己の世界、「魂の純潔」を至高の觀念とする世界以外の別の秩序のある事を、認めたくない、認める事を恐れる氣持がまじつて来る。外界に自己の世界とは異なつた秩序を認める事は、従つて自己の世界の相對性を認める事であり、さうなれば自己の世界は、その絶對の重味を失つて浮遊し、その結果自己の價值體系の變更を強ひられて来る。つまり、最初、全き蔑視によつて、背を向け去つた外界に、吾にもあらず肉體を先導としてワルテルは誘はれてゆく。その充分に魅力を持つてあらはれはじめた外界は、しかし彼のモラルとは背馳し、其處に、惡と汚穢としかないと定められてゐるのであつてみれば、ワルテルは、はつきりと眼を外に向け、肯定的にそれに向つて歩み出す事はできない。その臆病さを蔽ふ爲にも、自己の世界の優位に縋り、その絶對性を自らに納得させなければならない。

「事物と相關の感情を失ふこと。従つて現識が、全く純粹に獨立する様にまた如何なる外部への認識も、直觀的認識から離れる事なく、且つ、くりひろげられた幻想から、突如として目覺めない様に。その幻影に眩まされた私の眼が、周囲の諸現實に對して、もはや眼ざしを向けなくなるまで、それ程充分に確固として、もしも私が空想を熱視するに至つたならば、創り出された空想もまた私には現實的なものと見えるだらう」<sup>(註17)</sup>

これが自分の世界を守る爲に、ワルテルが爲す、最後の心情的な試みである。

彼の浪漫的夢想の世界は、モラルを支柱として、「魂の純潔」を至上の觀念とし、それが支配する世界を作りなし、これを守る爲の心情的な楯として、審美的にも、現實の背後の理想美への憧憬といふ態度がとられたのだつた。それ故に、モラルの喪失によつて完全に支柱を失ひ、崩壊しなければならない。

外界に對して、獨立した一個の非現實的夢想界「周囲の諸現實に對してもはや眼ざしを向けなくなるまで、それ程充分に確固として空想を熱視するに至る」程の陶醉を、常に、そして加速度的頻繁さで、抑壓された肉欲が水をかけ、内部から、これを裏切るのだ。謂はゞ、陶醉のさ中に、或は陶醉を維持させる、彼の「熱情」が弛緩する毎に、内部にある現實、乃至現世である肉欲が、防ぎようもなくその面貌を曝け出すのだ。そしてこの陶醉と失墜は、無限に反覆されなければならない。

「神よ、私はあなたのうちに隠れ家を求めました。永久に私の心を擾すまいとして。けれども、あなた、おゝ神よ、何時まで、何時まで、あなたは私をお捨ておきになるのでせう。何時迄私はあなたを身近に感じ勝利を信ずることなしに、闘ひを續けるのでせうか」<sup>(註18)</sup>

肉欲だけが、彼の浪漫的夢想世界の敵であつたなら、ワルテルはなほ、完全な勝利を期待できないこの闘ひを、然し勝利を信じて、續けたかも知れない。然し、當然の事ではあるが、彼の批評精神は、つひに、彼が追求し續けた、理想そのもの、「魂の純潔」を至上律とする夢想世界の秩序と、それを規定するビュリタニスムといふ自己の信仰形式に對し

追々に疑惑の度を強めて行く。一つの理想にとつて、かうした懷疑程に強大な敵があらうか。それは根柢から變革を迫る強さだ。

それは兎も角として、ワルテルが、モラルの面で、最後に綻らねばならなかつたのは、「神の攝理」の觀念だつた。

神の戒律への獻身といふことを、支柱として、閉ちこもつた世界であるから、その破滅に頻した世界を、最後に支へるものも、やはり神の觀念でなければならない。既に肉欲によつて、内部から破壊されつくされようとしてゐる世界、この世界の秩序を、やはり奥所から統べてゐるものがなければならない。

「そして、神が人々をみそなはし、その努力を祝福し給ふなら。もしさうでなければ人の生涯は總て無である——そして人がその何たるかを知れば、闇の中に發狂して恐怖の叫びをあげるであらう」<sup>(註19)</sup>

然し、アリサが、英雄的な、徳の追求の努力の涯に、神の沈黙しか得られなかつたやうに、夢想の世界を守るための、最後の試みである、この悲痛な訴へも、答ない、神の沈黙に遭ふ。その結果ワルテルは、自己の世界の支柱を全く失つてしまふ。

「神よ、神よ、幾度、私は子供が父を呼ぶやうに、爾を呼んだ事であらう。しかも爾はつひに私に答へない」<sup>(註20)</sup>

ワルテルの、「魂の純潔」といふ理想と、それを追求する爲に、閉ちこもつた浪漫的假構の世界とは、その理想を背後から支へてゐるはづの、神の不在に遭つて、支柱を失ひ、崩壊しなければならない。そして、ワルテルも、それと共に死んでしまふ。

然し、此處から、作者ジイドと、その分身である、ワルテルの運命とが截然と分かたれるのであるが、ジイド自身は、外界の侵入と共に、自己の世界の虚無に直面し、破滅はしない。何故なら、このワルテルの假構の世界を、最後に、決定的に崩壊させたものは、單なる夢想の消失による外界の氾濫ではなく、内部の批評精神によるピュリタニズムのモラルへの懷疑、更に批判だつたから。そして、ワルテルが、神の沈黙に遭ひ又死に到るといふ事は、ジイド自身はワルテルを乗り越えた所に、新しい精神の立脚點に立つて、恰度ゲーテがヴェルテルを死なせたのと同じ意味で、死なせた事によつて、自己のロマンチスムの缺陷と限界とを客觀視しえたといふ事に外ならないだらう。

「田舎で、私の行會ふ、未知の人々に對する、可笑しな感動——休んでゐる一人の子供に對する……單純な幸福……『靜かに流れるシロエの水』」<sup>(註21)</sup>

手記の終り頃に出て來るこの章句は、外に向つて反應して行くべき感受性を、一切、激しい緊張のうちに、内部に反射させて、孤獨の夜の中に、幻想を織る事にのみ熱中してゐたワルテル——ジイドが、單純な自然に接したときの、一種奇妙な異和感を、不思議にな

まなましく傳へてゐると共に、彼があれ程、拒み續けて來た外界が、それ程、嫌忌すべきものではなく、それどころか、あの狂熱と錯亂の形而上學的理想世界とは、全く無縁に、たゞ存在するといふだけで充分自然な、充分幸福な世界の自覺、乃至は發見、更に、それに對する何とない憧憬に似た情緒をさへ啓してゐる。

そして、ジイドの浪漫主義の快癒も、この彼岸から此岸への視線の轉換、現實へのよろこばしい覺醒によつてなされてゆく。この、ジイドに於けるロマンティスムから現實への覺醒、その歩み出しを、「ユリアンの旅」(Le Voyage d'Urien)の序章は、象徴的に、莊重に、韻高い文章で描き出してゐる。

「思索と研究と神學的恍惚との苦い夜が終つたとき、夜來、孤りまめやかに燃えつづけてゐた私の魂は、いまや黎明の訪れを感じながら、放心し、疲れきつて目を覺した。氣のつかぬ間に、すでに洋燈も消えてゐた。曉を前にして、わが窓は開かれてゐた。私は額を窓玻璃の露に濡らし、そして燃えつくした夢想を過去の中に追ひやりながら、眼をきつと黎明の方に向け、輪廻の狭い谷間へと歩み入つた。<sup>(註22)</sup>

註 1	Feuilles d'Automne (Mercure de France)	p 148
2	Si le Grain ne meurt (NRF)	p 246
3	ibid.	p 246
4	A.-M. Schmidt: La Littérature Symboliste (P.U.F.)	p 91
5	Si le Grain ne meurt (NRF)	p 198
6	Les Cahiers d'André Walter (NRF)	p 41
7	ibid.	p 18
8	Si le Grain ne meurt (NRF)	p 27
9	Les Cahiers d'André Walter (NRF)	p 104
10	ibid.	p 107
11	ibid.	p 108
12	ibid.	p 158
13	ibid.	p 136-137
14	ibid.	p 35
15	Les Nourritures Terrestres (NRF)	p 41
16	Les Cahiers d'André Walter	p 96
17	ibid.	p 117
18	ibid.	p 107
19	ibid.	p 144
20	ibid.	p 144
21	ibid.	p 169
22	Le Voyage d'Urien (NRF)	p 1

但し、Walterの世界を去つて、この序章の様に、ジイドは、直ちに現實に歩み出したのではない。それまでには幾許かの現實憧憬と躊躇ひの間に揺揺してゐたと見るべきで、この作品もその憧憬と躊躇ひとを語つてゐる。しかし、彼の視線が夢想を去つて現實を窺んでゐる事は確かだ。Walter共にジイドのロマンチスムは一應終焉を告げたとして差支へあるまい。Les Cahiers d'André Walterの引用文は建設社版ジイド全集の三好達治譯に従つた。